
真実は嘘で嘘は真実

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実は嘘で嘘は真実

【Zコード】

Z9541Z

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

灰原が買い物をしていると、路地裏にジンがいた。灰原は少し近くに行くとジンは誰かと話していた。話していた人物を見ると、灰原は自分の目を疑つた……

* 処女作品につき文がおかしいから注意を

名探偵コナン×戯言シリーズ
でも戯言のキャラでないwww

嘘の日常（前書き）

これは、コナンが零崎だつたりジンが零崎だつたりなんか2人が仲良かつたり

ありえなすぎる作品

無理な人はバックバック

(買い物はこれで終わったかしら?)

哀はそう言つてメモをみて博士の家に帰つていつた . . .

すると

「 . . . ? . . . ?」

哀の数100メートル先に見覚えのある黒い服の男を見つけた

「あれは . . . ジン? . . . 」

(なぜこんなところにいるの? . . . またか私たちのことがバレたん
じゃー・・)

しかしジンは誰かと待ち合わせしているのか
早足に路地裏の方へ行つてしまつた。

それを見た哀はなぜか逃げるではなくジンを追つてしまつた

(ああなんで私はに行なかつたのよーきっと上藤君のせいだわ! . . .)

そんなことを考えているうちにジンが行つた路地裏についてしまつた
そこではジンと誰かが話しており . . .

「 よお、久しぶりじゃねーか」

「 ああ。久しぶりだな元氣か?」

「 まあな、いろいろあるが」のとつぱんピングしてゐるが

「 そうか・・・」

哀は2人を見て自分の手を疑つた

(なんで? ! 彼がジンと話しているの?)

なんとそこにいたのは・・・

「・・・く・・・工藤君・・・」

「ああ? ああ灰原か」

「灰原? シェリーに似てるな」

「あれ? おめえに言つてなかつたか? あいつがシェリーだぜ?」

コナンは笑いながらジンにそうじつた

「ー? そりなのか」

(何で彼は普通にジンと話しているの? !)

灰原はそのことで頭がいっぱいだつた

「..な・・何で工藤君はジンと一緒にいるの・・・?」

哀がコナンにそう問いただすとコナンは

「家賊だからだよ」

・・・そう言つた

「家賊・・・? なによ・・それじゃあ工藤君とジンは血がつながつ
ていいの? でも血つのは? ..」

哀がそうこうと今度はジンが

「血はつながつていない...だが流血でつながつていい」

「流血? ..なによそれ・・・」

(何よそれ……わけがわからない)

哀が混乱して「ると」口ナンがこんなことをいつた。

「俺らは零崎一賊だ」

「零崎一賊……なに? それは」

「うーんどこから言つたらいいんだ……」

「全部よ全部詰してちよつけだい」

哀がそりこりと口ナンはジンの方を向きたずねた

「どうする?」

「…好きにすればいい」

ジンがそりこりと口ナンは少し笑い話し出した

「まず世界は4つに分かれている

表世界・財力の世界・政治力の世界そして…暴力の世界だ

表世界は今、灰原が生きているこの世界つまり一般な日常世界だ
財力の世界は…・・・簡単に言うと表世界に一番近い世界で
政治力の世界は一種の結社みたいなものでその力は横向きに広い
最後は暴力の世界だな暴力の世界はい「異形・異端・異能こそが
支配する 秩序で無秩序な世界だ」おい、てめえなに俺の台詞どつ
てんだよ!—」

「別にいいだる」

「つてめえ!——「…早く続きを聞かせてくれないかしり?」」

「ああ、わらい。で零崎一賊がいるのは暴力の世界だ。

暴力の世界には殺し名があつて……」これはめんどいからまた今度

説明

するわ、その殺し名第3位が零崎一賊。零崎一賊つてのは一

〔理由なく殺す殺人鬼〕」

「…………？」

（今彼はなんて言ったの？理由なく殺す殺人鬼？探偵で殺人を許さない彼よ？）

「おめえがどう思おうがこれが真実だ」

「フツ、そう言つ」とだシエリーー」

「な・・ならひとつ聞きたいことがあるわ今までの探偵だったあなたは嘘だつたの？」

「嘘と言えば嘘だな。ああでも謎解きは結構楽しいからな俺が探偵している理由はたぶんそれだな」

「そんなん・・・じゃあ・・・」

哀はもう何もいえなくなつてしまつた。

「で、どうする？おめえはこの真実を知つてしまつた
それは変えようもない真実だ

これを一生自分の胸にとどめとくか

それとも警察に言うか・・・（まあそん時はおめえを殺すけど）
をあざつくる？」

「……ずいぶん甘いのだな。」

「俺だつて大切な仲間キャストを失うわけにはいかねーだよ」
「やつか」

「ナン」とジンがこんな会話をしている中哀は考えていた。

(私はどうあるべき……本当は警察に行つたほうがいいと思つけど
多分信じないだら……それにこんなところで工藤君を失いたくな
い……)

「私は……」

「お、決まったか?」

「私は……このことを……一生誰にも言わないわ。」

「へーやっぱそつか

「やっぱ?私が誰にも言わないことをわかつてたの?!!」

「いや、おめえの性格からこんなこと警察に訴へても信じられない
ないなら

黙つとく方だろ」

「……やつ」

少しの間沈黙が流れおもむろにジンが時計を見た

「……もうこんな時間か、戻らなくてはな」
そうこうでジンは帰つていった

「つわもつ時間かよ……あ、そうだ灰原に零崎の方の名前について
なかつたな」

「名前？？」

「ああそうだ。じゃあ改めて自己紹介な俺の零崎の名前は「零崎
真識」
で、ジンのまづが「零崎 仁識」これからもよろしくな灰原……。」

「ええ・・・・これからもよろしくへへ

私は「」のことを一生忘れないだろう
そして一生誰にも「」のことを話す」とはないだらうと
衷はやう思つた

壁の口端（後書き）

一九四七年一月

ぐだぐだしながら雜だし

やつがこなことをじてこまつた

監様の皿を洗してすこませてましたアアアア

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9541z/>

真実は嘘で嘘は真実

2011年12月29日21時46分発行